※ この通信は、これまでの号も含め、矢倉小学校ホームページでもお読みいただけます。

草津市立矢倉小学校通信　令和３年10月１日　NO.10

やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

勉強する姿勢が育つには

勉強しなさいと言うだけで、勉強するようになり、成績がよくなるなんてことはありえない。けれど、宿題せず遊んでばかりいるのを見れば「勉強しなさい！」と叱りつけたくなるのもよくわかる。何も言わなくても進んで机に向かえる子がいるかと思えば、前向きに取り組めない子がいる。何がそのようにさせてしまっているのだろうか。

そういえば、勉強に厳しかった父もよく言っていた。「勉強せいと言ったから、できるようになるものではない」と。父の場合は、かわりに「ここで宿題せい」だった。おそらく「まだ宿題していない、ちゃんとみてやって！」という母親の苦言を受けてのことだろう。たいてい、兄はさらっと片付け、横目でニヤニヤしながらそばにいて、苦しむ私をそっと助けてくれた。弟は宿題をしたのかどうかわからないまま、うとうと眠りかけていた。「見守り」と言えば聞こえがいいが、勉強嫌いの私にとっては、家族ぐるみの監視に思えたときもあった。やがて、そんな窮地から逃れようと、たとえ時間がかかっても自分で取り組むようにしていった。そこにはある種の知恵が働いていた。それは、苦手なことやイヤなことから逃れるためにはどうするか、というものだ。具体的には自分で自分を確かめるようにして片付けていけば、いつの間にかできるようになり、家でも学校でも、さほど苦しまなくてもすむというもの。そんな姿勢を認めたからか、やがて父はこんなことを言うようになった。「丸写しするばかり、聞くばかりでなくて、自分でも練りだすように」「やったつもりにならんように」である。これは今の私たちにも言えることだろう。画像をコピーしたり、録音したりして、情報を集めただけでわかったつもりになっている。それがどういうことなのか、自分なりの言葉に置き換え、いざというとき説明できなければ、なんの役にも立たないということだ。

こうして、一人で勉強できるようになったころのこと、忘れられない体験をした。認知症が進み、ほとんど自分から言葉を発しなくなった祖父がしてくれたことである。居間でノートを広げ勉強する私のすぐそばに座し、にこにこしながら、優しく、何度も背中をさすってくれたのだ。手のひらの大きさ、あたたかみ。包み込むようにしてそばに座り、私のしていることをのぞき込み、そうだその調子と大きくうなずくその息遣いは、今も鮮明に覚えている。家族みんなが尊敬する祖父が自分のことを気にかけ、ずっと見ていてくれた…そんな受けとめだった。進んで勉強するということは、誰にも心配かけずに一人でやっていけるようになること、自信めいたものをもつことができた瞬間だった。

このほど、学校に、学力学習状況調査の結果が届いた。これを受けて、学校ではどのようなところに力を入れていくとよいか検討し、日々の指導に取り入れようとしている。子どもたちには、ちゃんとしなさい、もっと勉強しなさいなどという、単純な声かけだけはしたくない。勉強は、厳しくもやさしく見守られ、自分で確かめ手に入れていくもの…そんな支え方をしていきたい。

校長　大林道範